

令和6年度 学校評価

学校満足度(保護者):4. 2(5段階評価)

評価の観点	評価項目	達成状況	本年度の取組と改善の方策	学校関係者評価
① 基礎基本	わかる喜びのある授業づくり	B	毎時間の目標と学習内容を授業の初めに示すことで、児童が見通しをもって学習に取り組めている。また、ペアやグループ学習で対話を取り入れたり、ICT機器を活用したりする等、学習意欲を高める工夫も行った。引き続き、まずは「聴く」指導を徹底し、落ち着いて学習に取り組める雰囲気醸成していく。また、教員の研修を充実させ、さらに授業の質の向上を目指していく。	・毎授業の初めに、目標と学習内容を示すことは、児童にとって、より学びやすく、わかりやすい授業展開につながっている。今後も継続してほしい。
	個に応じたきめ細かな指導		支援教員等による細やかな関わり、個の学力に応じた家庭学習の工夫、1～3年生の「がんばりタイム」の実施等、個別の指導の充実に努めている。今後も、これらの取組を継続・発展させていく。また、個に応じた支援がさらに行き届くように、柔軟な人員配置も工夫していく。	・「元気もりもり学習大作戦」は、テトルでアナウンスをしたり、「元もり通信」を発行して啓発をしたりと、保護者への情報発信を積極的に行い、家庭と連携した取組となっている。ただ、学年が上がるにつれ、児童の取組に慣れが出てきていることは課題である。
	家庭学習への取り組み		年度内4回の家庭学習強化週間に、「元気もりもり学習大作戦」を実施し、保護者と協力しながら、家庭学習の充実に努めている。また、「元気もりもり学習大作戦」の取組を分析し、「元もり通信」を発行し、家庭学習の取組改善に係る啓発にも努めている。来年度は、家庭での学習時間だけでなく、学習内容にも着目した取組を進めていく。	・家庭学習について、さらなる工夫が必要である。例えば、小テストを前提とした宿題、何かができるようになったという達成感を味わえるような宿題等、基礎・基本の定着を目的とした宿題だけでなく、児童が取り組む意義を実感することができる宿題も工夫してほしい。
	朝の学習への取組		全国学力・学習状況調査の結果分析から、読む力を強化するために読解力トレーニングを実施している。また、読書アプリ(Motto Sokka!)を活用した読書の推進、漢字・計算練習等の基礎基本学習等、児童の実態を踏まえ、曜日ごとに学習内容を工夫しながら展開している。今後も、より児童の興味・関心を高める読解・学習教材を準備し、また、学級文庫の充実に努めていく。	
② 道徳教育 人権教育	規範意識や道徳的判断力を高める授業	B	児童のことは「さん」付けで呼ぶこと、厳しい指導も丁寧な言葉遣いで行うこと、授業中は標準語で話すこと等、児童の人権を尊重した接し方を意識した。道徳指導においては、今後も、どの教室でも同じ流れ・方法で授業を行えるように、折に触れて中南小スタンダードの再確認していく。また、来年度に向け、年間指導計画の練り直しを行い、さらなる指導の充実に努めていく。	・社会生活の変化にともない、児童の生活経験の場が少なくなってきた。よって、さまざまな価値観にふれる機会を確保していくことは大事である。それだけに、にこにこ集会や日々の道徳の授業は、非常に貴重な人権教育の場である。今後も継続して取り組んでほしい。
	自己を高め、友だちを思いやる心や態度の育成		にこにこ集会(人権集会)に向けての作品作りを通し、友人や周囲の人々を思いやる心を育んだ。また、お互いの発表を聞き、児童の言葉で人権課題を伝え合うことで、学校全体の人権意識の高まりを促すことができた。「命と人権の日」には、集会での担当教員の話に加え、各学級にて、命や人権をテーマとした話し合いの時間を持ち、児童が自分事として捉える工夫もしていく。	・児童の実態を踏まえ、さらに、時代の変化の中で生じる新たな課題にも応じて、道徳の年間指導計画の見直しを、随時行っていくことは重要である。
	道徳の教科としての評価		1・2学期の学習の評価は、授業中の発言や道徳ノートへの記述をもとに、懇談会等で、必要に応じて保護者とも共有している。3学期には、通知表で、道徳の時間の年間を通した学びと成長の姿を伝えている。今後も、児童の学習意欲が高まり、勇気づけることができるような評価基準や評価方法を工夫していく。	・まず、教員自身が模範となり、児童の人権を尊重した言動を意識しているのは、とても大切なことである。
③ 特活学校 行事	いじめを許さない学級作り	B	年間を通じて計画的にいじめの授業を実施した。オープンスクールでは、保護者や地域の方への啓発も含め、いじめ・人権・心のケアをテーマにした授業を公開した。また、学校相談シートや学期1回の面談を行い、細やかな対応を心がけた。来年度は、いじめの授業を行う時期を校内で合わせることで、学校全体でいじめを許さない雰囲気作りと意識の高まりをねらっていく。	・いじめ対応について、アンテナを高くして、組織的に取り組んでいる様子がうかがえる。ただ、SNS上のいじめは見えにくい。引き続き、児童の些細な変化等を細やかに見取る必要がある。
	児童の主体性を重視した活動の充実		毎月1回、児童会主催の集会(楓づ子タイム)を実施している。また、6年生が主体となり、1年生仲間入り集会、縦割り交流会(フェスティバル)、運動会のエール交換等を行った。3学期には、5年生が中心となり「6年生ありがとう集会」を計画し、学校のリーダーとしての自覚を高める機会としている。今後は、これらの取組を下学年にも広げ、児童が学校を創る意識を高めていく。	・学習発表会のような、子どもが地域住民や保護者の前で発表する機会が増えればよい。実施に係る課題もあると思うが、児童主体の活動に、一層力を入れてほしい。
④ 特別支援 教育	特別支援教育に係る研修の充実と共通理解	A	年度初めの職員会議等で、支援を要する児童について、教職員間での情報共有を図った。また、夏季休業中には、難聴児に対する理解や発達障害、カウンセリングマインドをテーマにした研修会を実施した。来年度も、個の特性に応じたよりよい支援の方法について学ぶことができる研修会を系統的に実施していく。	・引き続き普通学級と特別支援学級の児童が、自然に交流できる雰囲気大切にしていほしい。
	一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援		サポートファイルを作成している児童や配慮を要する児童については、北はりま特別支援学校コーディネーターから行動観察や相談の場を設け、効果的な指導方法についての助言を受けた。また、教職員間の情報共有を密に行い、各児童のニーズに応じた具体的な支援を、組織的に行った。今後も専門機関等との連携を積極的に図りながら、よりよい支援に努めていく。	・個に応じた関わり方・指導方法が多様化する中で、学校だけではなく、外部機関との連携が一層重要である。
⑤ 安全・防災 健康・食育	生命を守る安全教育の推進	B	登下校指導を月1回ずつ実施した。また、登下校時の課題を耳にした際は、速やかに担当教員から指導を行い、改善を促した。交通安全教室では、警察・PTA・交通安全協会との連携で実施し、1・2年生は歩行訓練、3～6年生は自転車訓練を行い、安全な歩行の仕方や自転車の乗り方を学んだ。この実技を伴った学習形態は、来年度以降も継続して実施していく。	・児童数の減少により、1人で下校する地区があることに危惧を抱いている。交通安全教室等を通じ、自分の命を守るために、主体的に判断できる力を育てていくことが重要である。
	実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進		年3回(水害・火災・地震)の避難訓練に加え、1. 17防災学習を行った。また、夏季休業中には、警察の指導の下、教員を対象に不審者対応訓練を行った。来年度は、教育委員会生活安全課や消防署等とも連携し、煙体験や消火訓練等を体験型の学習を実施し、防災意識をさらに高める。また、訓練を休み時間に行うことで、児童に主体的に判断し、行動する力を育む。	・防災訓練や不審者対応訓練等について、マンネリ化とならないように、さまざまな状況を想定する等、工夫を施しながら取り組んでいる。今後も継続してほしい。

	健康に関心を 持ち、体力向 上に取り組む 児童の育成	B	家庭学習の確認表に、「早ね・早起き・朝ごはん」のチェック欄を設け、意識付けを行った。水泳、朝のかけ足、縄跳び運動等、季節に合わせた体力作りを学校全体で取り組んだ。今後は、児童自らが健康作りに励むことができるように、保健委員会発信の啓発活動を工夫する。また、流行の運動を取り入れる等、児童が楽しみながら、体力作りに取り組むことができる工夫を行う。	・体力づくりや正しい食習慣は、児童の将来に深く関わってくる。よって、今後も、栄養教諭による食育指導等、魅力的な学習を実施してほしい。また、保健委員会発信の取組等により、児童が自分事として問題意識を持つように促してほしい。 ・授業時数確保の観点から、体力づくりは、体育の授業等を有効活用しながら、計画的に取り組むことが大切である。
	望ましい食習慣の育成		栄養教諭による玉葱の皮むき体験や魚の食べ方指導、食育啓発動画の視聴等を実施した。1年生では給食センターの見学をし、食への興味や感謝の思いを育んだ。日々の給食では、食事マナーや好き嫌いをしないことを指導している。今後も、学校での食育の取組を通信・HP等で保護者に発信していく。また、残食量を減らすため、給食委員会を中心とした啓発活動を行う。	
⑥ 生徒指導	挨拶、掃除等の基本的な生活習慣の確立	B	児童会が主体となり、生活のめあてを設定し、朝会等で呼びかけを行った。その成果が、多可町の「あったかあいさつ運動表彰」として評価された。掃除では、各分担場所に教員の目が行き届くように配置し、児童と教員と一緒に掃除に取り組む工夫をした。来年度は、縦割り班掃除等も取り入れ、高学年がリーダーとなり、児童主体で掃除への意識を高めるようにしていく。	・「あったかあいさつ運動表彰」は児童の励みになる。今後も児童会がリーダーとなり、あいさつの活性化に取り組んでほしい。 ・保護者目線では、気持ちのよいあいさつができていたと言いたい場面もある。学校の指導だけに頼るのではなく、まず、家庭・地域から気持ちよくあいさつをし合う雰囲気づくりを行ってきたい。
	子どもと向き合い、子ども理解を深める生徒指導の徹底		生活相談シートや連絡帳等、こまめにチェックをし、気になる児童には細やかな声かけを行っている。また、定期的に担任との面談を実施し、児童の声に耳を傾ける時間を設けた。引き続き、日常の中での丁寧な見取りを行い、職員会議等で児童の情報共有を行い、組織的な対応を心がけていく。	
	不登校ゼロ、いじめゼロの実現		いじめの授業、児童との面談、生活相談シートの等を通じて、いじめの未然防止に努めた。また、月1回のいじめ対策委員会に加え、トラブル時には臨時での開催を行い、組織的な事後対応を行った。不登校児童については、児童支援教員を起点として、保護者・教育委員会・外部機関等との連携を密にとりながら、児童の心に寄り添った対応を心がけていく。	
⑦ 教職員の 資質向上	教育の専門家としての資質・指導の向上を図る校内研修の充実	A	テーマ「共に高め合う喜びのある学級・授業づくり」のもと、学級づくりと授業づくりの両輪で研究を推進した。学級づくりでは、学級・学年経営案を作成し、学年団による交流会で振り返りと検討を行った。授業づくりでは、「授業づくり10のポイント」に基づき実践した。また、講師を招聘し、研修を行った。来年度は、学級公開や研究授業を増やし、教員の協働的な学びを推進する。	・研究テーマのもと、系統性のある取組が展開されている。学級づくりと授業づくりの両輪での取組は、学校の実態に合っている。来年度のさらなる充実を期待する。 ・チーム担任制については、多様な視点からの児童理解が可能になり、それぞれの長所・よさを見取る機会が増えたことは大きな成果である。課題の検証を行った上で、来年度もぜひ継続してほしい。
	教師としての使命感や子どもに対する愛情、責任感		課題を抱える児童に関しては、速やかに情報共有を行い、担任だけでなくとどまらず、すべての教職員が支援に関わる体制を整えている。また、スクールカウンセラーによる校内研修等を実施し、児童理解や支援方法について、学びを深める場を設定した。チーム担任制については、多様な視点からの児童理解が可能になり、児童のよさを見取る機会が増えた。この取組は、来年度も継続していく。	
⑧ 組織運営	教育目標達成に向けた、それぞれの校務分掌における意欲的な取組	A	校務の各担当において、前例にとらわれすぎることなく教育効果を考えて意欲的に取り組めた。新たな取組にも、教職員の協力のもと進めることができた。今後も、チームで課題解決する意識を高め、心理的安全性が確保される職員室運営を行っていく。	・過去と比べて、学校が急速に小規模化している状況にある。よって、前年踏襲ではなく、時代・地域のニーズを踏まえつつ、児童の現状に即し、効果のある行事内容に精選していくことが大切である。 ・教員が、心の余裕をもって児童に接しられることが、何より重要である。そのために、導入が進んでいるICT機器を有効活用し、スピーディーな情報伝達と円滑な情報共有等が、着実に実現していることは、とても望ましい。引き続き、教職員の働き方改革を推進していったほしい。
	学校の経営方針の浸透、報告・連絡・相談の徹底と情報の共有化		教育活動を進めるに当たっては、情報伝達が速く、職員会議・各種委員会等で情報共有をした上で、組織的な取り組みが展開できている。変化に対応できる組織であるためには、情報共有が大切である。さらに、コミュニケーションがとりやすい関係性を構築していく。	
	勤務時間の適正化		定時退勤日の取組が、4月の実行率36%から12月までの平均実行率72%へと大きく改善した。また、業務効率化のために校務DX化を図り、教職員間の情報共有や会議資料等「いつでもどこでも」が実現した。今後も、教職員がタイムマネジメントを意識した業務遂行に努められるように、意識改革を進める。また、学校行事や業務も、前例や慣例にとらわれずスリム化を検討する。	
⑨ 施設・設備	学習・生活の場として適正な施設・設備等の管理・整備	B	教員による校内安全点検のチェックシートをクラウド管理にしたことで、全教員が全施設の状況を確認できるようになった。児童トイレは、出入口にドアがない箇所が複数あり、目隠し用として、簡易カーテンを付けている。また、冬場の凍結を防ぐため、夜間は出入口に板を設置している。引き続き、トイレのドア取り付けの要望を教育委員会に挙げていく。	・何より、児童の安心・安全に配慮した施設整備を優先すべきである。また、空き教室は物置等として使用するのではなく、貴重な教育資源として有効活用してほしい。 ・来年度は、人数の多い学級について、児童の発達段階や教科の特性等を考慮しながら、少人数による学習形態の実施を検討してほしい。それにより、ゆとりのある環境で、落ち着いた学習が展開されることを期待する。
	整理整頓された学びの場にふさわしい環境づくり		児童数が多い学級は、教室が手狭であり、隣接する空き教室を活用し、教材や作品、学習用端末等の整理・管理をしている。また、電子黒板は、壁面備え付けの教室を割り当てることで、ゆとりのある学習・生活空間の確保に努めている。来年度は、大規模学級について、児童の発達段階や教科の特性等を考慮しながら、少人数による学習形態の実施を検討する。	
⑩ 家庭・地域との連携	家庭や地域への情報発信と情報収集	B	HPのこまめな更新により、学校生活の様子を広く発信している。また、行事予定の変更や登下校時の注意喚起等は、テトルを活用し、速やかに情報発信している。今後は、保護者への紙面連絡を、内容に応じて順次テトルでの発信に移行する。保護者アンケート等については、Google フォームを活用し、より気軽に、意見や思いを学校に伝えることのできる仕組みを整える。	・HPや学校通信からは、児童の学校生活の様子が、いきいきと伝わってくる。また、テトルも即時性にすぐれ、効果的に活用されている。 ・コロナ禍が終わり、保護者・地域のボランティアが、学校に戻ってくるようになったことは望ましい。子どもの登下校の見守りや施設の整備等、ボランティアの輪がさらに広がることで、社会に開かれた学校づくりが、一層進んでいくことを願う。
	保護者や地域の人々と連携した教育活動の推進		学習活動のニーズに応じて、保護者・地域ボランティアを募り、図書室整理、オープンスクールの受付、家庭科のミシン指導、プール監視員等で、多くの方々と連携が実現した。今後は、マラソン大会の交通整理、学校施設の整備等、ボランティアの募集枠をさらに広げる。また、近年実施を見送っていたPTA 奉仕作業についても、来年度の再開を検討する。	